

研究班番号【4】

教育のすゝめ

保健班：上野 望結 瀬野 真裕子 藤田 優花

要約

本研究の目的は、日本の教育の現状を明らかにすることである。調査において、PISA において上位の国であるシンガポールと教育環境や教育制度に違いがあることが分かった。従って本研究では、日本とシンガポールを比較した結果、日本は現在進行中であるギガスクール構想に加え、子供たち一人ひとりの勉強に対する意欲を高める環境作りが必要であると結論付けられた。

Abstract

Purpose of research is to reveal that current status of education in Japan. In the survey, it was found that there is a big difference in the educational system from Singapore, which is the top country in PISA.

Therefore, in this study, compare Japan with Singapore, it was concealed that Japan is needed to create an environment that motivations each child to study, in addition to the ongoing Giga School concept.

1. 序論

PISA というテストから、世界の国々における学力の順位が見られるようになった。PISA とは、OECD(経済協力開発機構)が3年に1回、小学校6年生と中学校2年生を対象に行っている学力到達度調査である。シンガポールは、PISA において長期に渡り上位5位を保っている。(国立教育政策研究所. OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) . 2009~2018) 先行研究から、シンガポールと日本では、教育制度が大きく異なることが分かった。(岡本佐智子. “シンガポールの教育システムとマンパワー政策.” 北海道文教大学論集 15 (2014)) そこで、本研究ではそれぞれの教育の歴史や現在における教育の取り組み方に視点を置いて比較を行い、教育への向き合い方を考察する。

2. 研究手法

国家予算における教育費の割合や、学校の授業時間やクラス人数、教育制度など、様々な観点からインターネットや文献を使って日本とシンガポールの違いについて比較し、調査した。

3. 結果

2018年のPISAでは、日本は読解力で15位、数学的リテラシーで6位、科学的リテラシーで5位という成績だった。(国立教育政策研究所, OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) , 20

18) 対してシンガポールは、どの分野においても2位と、好成績を修めた。シンガポールと日本では国家予算における教育費の割合は前者が20%、後者が5%と大きく異なった。授業時間の合計とクラスの人数はあまり差が見られなかったが、授業1コマの時間はシンガポールが平均30分、日本は平均50分と大きな差があることが分かった。また、下校時間がシンガポールでは13時30分、日本では16時と、大きく異なる。PISAの数学の試験では、625点以上の高得点層が日本は37%であるのに対してシンガポールは51%。理科では日本が22%で、シンガポールは48%と日本を大きく引き離している。

また、シンガポールでは能力主義やストリーミングという制度を採用している。能力主義とは、年齢に関係なく、個人の能力によって進級や留年がある制度、ストリーミングは、小学6年生の児童にPSLE (Primary School Leaving Examination) と呼ばれる初等学校卒業試験の受験を義務付け、PSLEのスコアによって、中等学校で学ぶコースが決まる制度のことである。発育年齢ではなく、自身の力に応じた教育を受けることができる環境であるが故、習熟度に応じてきめ細かい指導を受けることができるのが、PISA調査の結果に現れているといえる。

4. 考察

1コマの授業時間がシンガポールは短いため、集中力が続きやすいと考えられる。また、国家予算における教育費の割合から見ても、シンガポールが国を挙げて教育に対して力を注いでいることが分かる。加えて、シンガポールは放課後の時間が長いので、数学スクールやスポーツなど、多岐に渡る課外活動に時間を割くことができ、日本に比べて充実していると考えられる。また、年齢や学年に関係なく、習熟度に応じてコース分けをしていることが、個に応じた指導へとつながっていると推測される。日本でも選択別や習熟度別の科目が一部取り入れられているが、ランク付けをすることによる抵抗感を持つ人も少なからず存在し、本格的に学校全体で取り組むのには難しい環境である。

5. 結論

2023年までの達成を目標としているギガスクール構想によって、ICTの環境整備を進めていくだけでなく、勉強へのやる気を育む環境そのものを形成することで、子供たちの勉強に対する意欲を向上させる必要がある。また、今回はシンガポールのみとの比較であったが、PISA調査で常に上位に食い込んでいる北欧諸国の国々の特徴も調査し、ギガスクール構想との関連性や学校そのものの在り方等にもアプローチしていく必要がある。

6. 参考文献

岡本佐智子「シンガポールの教育システムとマンパワー政策」 北海道文教大学論集 15 (2014): 111-23.

勝野頼彦「諸外国における教育課程の基準 (改訂版)」

外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/>

OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) の調査結果

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/detail/1344310.htm

国立教育政策研究所 HP

<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/index.html>